「ありのままのわたしを生きる」ために

その後

第1回

小さな仲間たちとともに

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード 状態のトランス女性。趣味の交流会運営で 右往左往する日々を送っている。

みなさん、はじめまして or ごぶさたしています。京都の公立高校教員の土肥いつきと申します。

わたしは2009年4月から都合5年間「いつきのつれづれ日記」と「『ありのままのわたしを生きる』ために」という連載を書かせていただきました。ちなみに後者はわたしの自分史で『性教育ハンドブック vol.6』となっています。今回、3月までの7回ですが、「自分史の続きでも」ということで、再度書く機会をいただきました。が、「さて何を書こう」と思いました。子どもの頃、歴史学者だった父親に「現代日本を歴史的にどう評価する」とたずねると「"現代"は歴史ではない」と言われたことがあります。つまり、「自分史の続き」は、まだ自分「史」とは言えないということです。ただ、2014年からの6年間、いろいろなことがあったので、その間にあったことや考えたことを書いてみようと思います。

今回は、トランスジェンダー生徒交流会のことです。

わたしは現任校で36年間勤務をし、そのうち23年間人権教育担当をしています。そんな教員生活の中でたくさんの被差別部落出身や在日外国人の生徒たちと出会ってきました*1。わたしは被差別の立場にある子どもたちから「子ども同士をつなぐ大切さ」教えてもらい、部落の中での学習会や在日外国人生徒交流会にとりくんできました*2。そんなわたしのところに、2003年頃から全国のトランスジェンダー生徒から相談メールがきはじめました。特例法*3はできたものの、子どもについては放置の時代でした。わたしは「この子らの交流会をつくらなくてどうする」と思いました。

そして2006年、ようやくはじめての「トランスジェンダー生徒交流会」を開催しました。集まってきたのは5人の高校生・専門学校生でした。昼前に集まって、4時間みっちり話しあって、夕方から焼肉を食べ、夜はカラオケに行き…。いかにみんなが出会いに飢えていたかを実感した一日でした。ただ、それからの交流会が順調だったかというと、そういうわけではありません。参加者はトランス女性の生徒とその彼氏、引率教員とわたしの4人だけ、しかもトランス女性の子が

用事があって先に帰ってしまい、残った3人で顔を見 あわせて「帰ろうか」となったこともありました。

そんな状況が一変したきっかけは2012年12月でした。 大阪府内の小学校から「うちの4年生の児童がカミング アウトをしたいと言っているので、事前に子どもたち に話をしてほしい」というメールがありました。わた しは「本人がしたいならすればいい」と断りました。そ れでも「どうしても」と言われ、しかたなくその小学 校に行くことにしました。40分ほどの話を終え、先生 が「感想を誰か」と言うと、一人の子どもが手をあげて 「わたしもいつきさんと同じ気もちがあって…」と語り 出しました。この子かと思いました。ものすごくしっ かりしています。わたしなんて来なくてええやんと思 ったのですが、話し終えたその子を見ると、目から涙 があふれているのが見えました。授業の後、すぐにそ の子のところに行って、思わず抱きしめてしまいまし た。「仲間やんな」。「うん」と頭が動きました。「また会 おうな」。また「うん」と頭が動きました。しっかりし てるんじゃなくて、しっかりしないと生きていけない。 自分の内からパワーを出すことで、ようやく立ててい る。そんなオーラが伝わってきました。「小さな仲間」 に出会えたこと、そしてその子への愛おしさに、わた しも思わず泣いてしまいました。

翌年から、あの時の小学生 K ちゃんも含め、たくさんの小学生が参加するようになりました。話しあいをしようと思っても無理、子どもたちはかくれんぽをして遊んでいます。まるで学童状態です。そんな子どもたちの姿を見ながら、この子らがあたりまえに生きられる社会をつくらなきゃと思いました。今もたくさんの「小さな仲間」が交流会に参加し、自分が思う性別での学校生活を実現するための元気を互いに与えあっています。 K ちゃんも今は大学生、「小さな仲間」にとっての大切な先輩です。こんな「場」を続けることが、社会を変えていく一歩なのかなと思います。

- *1 このあたりのことは本紙の No.14 や No.16 に書かせていただきました。
- *2 このあたりのことは書籍『「ありのままのわたしを生きる」ために』に加筆させていただきました。

*3 性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律